

## 第十四章 リアル集結 II

### 1

救出された清香と雛田義文は、萌黄や伊里江、さらには大学の職員らに支えられ、無事キャンパスの中に入ることができた。

ふたりを襲撃した十数人の男たちもまとめて捕えられ、迷彩服らによって最寄りの警察署に護送された。ただし腕を折られた男は病院に、萌黄に潰された車はレッカー車にズルズルと引きずられていった。

現場にいた者で、萌黄たちに近づく者はなかった。彼らには眼前に展開した光景がまるでCGとワイヤーアクションの合成で作られた映像のように見えた。でなければ、あれほど早業で暴徒に近づいたり、車を一撃で踏みつぶすという光景を、どう理解すればいいのか。

それでも結局、彼らが納得し、自らの恐怖心を抑えるためには「リアルは怪物」という結論に行き着くしかないのだった。

一時は意識を失った雛田は、もう大丈夫、コブを作っただけだと笑って訴えた。それでも大事を取って、大学

の医療班は彼を担架に乗せ、医務室に直行させた。

清香にはもちろん、リアルの判定検査が待っていた。

彼女は萌黄に伴われて講堂へと向かった。そして彼女が検査機をくぐった数分後、その判定結果が出た。

「陽性です」。検査官はそう告げた。

清香がリアルであることが客観的に証明されたのだ。

「まだ信じられない。わたしがいま話題のリアルだったなんて」

そばで萌黄が頷いた。清香は萌黄の手を握ったままだ。「おじさま」がいないので不安なのだ。

講堂には萌黄の父親が来ていた。萌黄が捨てたモニター用の腕輪の代わりは、すでに昨夜遅く届けられていたが、直に会うのは二日ぶりだ。

「今朝、空を飛んだというのは事実か？」

父親は娘の顔を見るなり訊ねてきた。

「うん」

「父さん、びっくりしたぞ。いきなりエネルギーが計測レベルを振り切ったので、これは故障だと勘違いしてしまった」

言うと、父親はポケットから別の腕輪を取り出し、萌黄の前に差し出した。

「ん？ 今度は捨てやんと、ちゃんと填めてるよ」

「いや、故障だ」

「え、故障やなかったんでしょ？」

「振り切った拍子に腕輪のセンサーが壊れたんだ。コイツにはより高性能のセンサーを仕込んだから、今度は飛んでも跳ねても大丈夫だろう……たぶん」

萌黄は腕輪を交換した。前のものよりも幅があり、厚みもある。

「あんまりおしやれやないね。Tシャツには似合わへんわ」

父親は笑ってとりあわない。萌黄はしぶしぶ腕に通した。

「それじゃ父さんは、これから本社に出向く用事があるので、これで失礼する」

「あの」萌黄は真顔に戻って「むんに会いたいんやけど、なんとかならへん？ おとつい以来会ってないし、移った部屋には内線電話もないから話もでけへん」

携帯の電波は、地下十階までは届かない。

父親は、あつと小さく叫んで額に手を当てた。

「スマン、伝言を預かってるのを忘れてた」

「伝言？」

父親は自身の携帯を取り出し、赤外線送信で萌黄の携帯にデータを転送した。父親は時計に目をやり、「副社長にどやされる」とぼやきながら足早に戻っていった。

「むんさんって、あなたのお友達ね」

そばで清香が言った。

「はい、ずっとわたしを助けてくれてるんです」

萌黄は伝言メッセージを再生させた。液晶画面に地下の部屋の内部が映った。

（え、なんで？）

萌黄は携帯を持っていないほうの手を口に当てて驚いた。

映像は、むんが自分の携帯で撮影したものだった。彼女はベッドに伏せ、頭を枕に乗せていた。そばには点滴の容器を調整している女性看護師の姿があった。

『萌黄い、わたし風邪ひいてしもたみたい。でも安心して。熱は低いし、症状も軽い鼻風邪程度やから……ツクシヨン！』

萌黄の胸は痛んだ。ヴァーチャルのむんは、あの逃亡の日々で心身ともにくたびれていたのだ。今になって溜まった無理が出てきたのに違いない。鼻声が痛々しい。

『萌黄が帰るまでには元気になるからなー』

「帰る」とは、向こうの世界に、ということだろう。萌黄は涙をこぼしそうになった。本当ならむんもいっしょに連れて帰りたい。しかしそれはできない相談なのだ。

「お気の毒に……」

清香がぼつりと言った。

応接室のドアから野宮助教授が出てきた。彼は萌黄の

姿を見つけると、

「おー萌黄クン、戻ってきたか。新しいリアルがまたひとり現れたんだってな」

「先生、この人ですよ」

萌黄が紹介すると、清香はていねいにお辞儀した。

「影松清香と申します」

「ほお、あなたか。まるでモデルさんみたいだな」

「センサー。それセクハラ」

「そうか？ そんなことより、炎クンが寂しがってっとな。早く来てくれ。影松クンにも紹介しよう」

助教教授はとつとと部屋に戻り始める。萌黄は清香を促して後についていった。伊里江も無言で続く。

擦れ違う男性が次々と清香に振り向く。さすがだと萌黄は思った。彼女を知っていようがそうでなかるうが、その容姿は人目を惹かずにはいられない。

応接室に入った瞬間、炎少年の明るい歓声が彼らを出迎えた。

「ワオ！ ひよっとしてミュージシャンの影松さん!？」

「え、ええ」

清香は炎の様子に度肝を抜かれたようだ。

「僕、毎日あなたの音楽を聴いています！」

すると野宮は少年と清香を交互に見て、

「影松クンは音楽家なのか？ 売れてるの？」

などと失礼なことを訊いている。萌黄は憤慨した。

「ドームや武道館をいっぱいにできる人ですよ」

「はーっ、そんな有名な人がリアルとは露知らず」

清香は真剣な面持ちで前に出た。

「そのリアルというのが何なのか、詳しく教えていただけませんか？」

野宮は清香の言葉にあらためて口許を引き締めた。そして四人のリアルを眩しそうに眺めた。

## 2

野宮と萌黄が交互に語った話は、どれも清香を驚嘆させずにはおかなかつた。特にヴァーチャル世界の成立については、なかなか飲み込めないようだったが、リアルがこの世界でどんな立場にいるのかを聞かされると、目を閉じて何度も頷いていた。

「思い当たる節があります。わたしもここを撃たれたのに、死なないどころか傷跡さえ残りませんでした」

清香は前髪を上げて額を見せた。

「あの時はもう無我夢中で、深く考えている余裕などありませんでした。それに目に映るものすべてがひっくり返っていて、自分の頭はおかしくなったんだと信じてしまい……。おじさまが助けにきてくれなければ、今頃わ

たしは自分の命を絶っていたかもしれません」

その時のことを思い出したのだろう。清香の二の腕に鳥肌が立った

「スタジオのスタッフのご協力もあって、わたしたちは命からがら長野を脱出することができました。そして岐阜、滋賀と西を目指して車を走らせてきましたが、一瞬たりとも生きた心地がしませんでした。なぜなら、街中のあちこちで長野防衛隊を見かけたからです」

「長野防衛隊？」

「はい、私を撃った警官も彼らの仲間でしたが、彼らの乗った車には仰々しい文字でそう書かれていたので、遠目にもそれだと判断できたのです。長野から追って来たのかもしれない、そう思ったわたしたちは、できるだけ目立たないように注意しながら、それでも急いで京都入りしました。萌黄さんが道を示してくれたのです」

萌黄はソファの上でみじろぎした。

清香は肩の力を抜き、頬の筋肉を緩めた。

「でも一番困ったのは地図です。ナビの声が『次の角を左です』と言っても、わたしはハンドルを右に回さないといけないのですから」

「その長野防衛隊ですが、どんな奴らでしたか」

野宮が問いかけた。

「判りません。ただハッキリしているのは、リアルのお

たしをリアルと呼んで目の敵にしていたことぐらいでしようか。しかも左右の入れ替わりなど、詳しい情報に精通しているようでした。

わたしを撃った警官は警視庁から派遣されたと言っていました。それが本当なら、長野防衛隊は公安の中枢部にまで浸透していることになります」

野宮は後を引き取って、

「リアル排除では、政府も長野防衛隊も目的は一致する。しかし政府は、長野に発生した暴徒鎮圧に機動隊を出したぐらいだから、裏でつながってるとも思えんが」

その時、ドアとは反対側にあるガラス窓が激しく叩かれた。一同が驚いて顔を向けると、そこにひとりの男が立っていた。

「おじさま！」

雛田だった。彼はまるで逃亡犯のように左右を見回すと、また叩き始めた。開けろと言ってるのだ。

「待って」

清香が急ぎ駆け寄って窓の錠を外した。雛田はサッシが開くのももどかしく、上体を室内に突っ込んで、転がるように部屋の床に尻餅をついた。

「何ですか、あなたは。無作法も甚だしい」

野宮の非難も無視して、雛田は清香に近づくと、

「大丈夫か？ 妙なことはされなかつたか？」

深刻そのものの顔で訊ねる。清香は不思議そうな顔で、「どうして？　ここは安全よ」

「いや、姿が見えなくなったら、急に心配になってな」  
まるで恋人か愛娘を気遣うような表情である。萌黄はクスリと笑いかけて、ハツとした。

（この男性、どこかで――）

萌黄はソファを離れ、前に進み出た。

「あのお、違ったらごめんなさい。もしかして雛田義史さんじゃ？」

男はビクツと身体を震わせ、身構えるように腰を引くと、

「……君は？」

すると清香は言った。

「おじさま、忘れたの？　わたしたちを助けてくれた光嶋萌黄さんじゃない」

男は目をぱちぱちとまばたき、ああとうめいた。

「君が光嶋さん？」

「は、はい」

途端に男は姿勢を低くした。

「すみません。どうも疑心暗鬼になってしまい……。

おっしやるとおり、私は雛田義史です」

「うわーっ！　じゃあ、カゲヒナタの雛田さんですよね。お会いできるなんて光栄です！」

萌黄は目を輝かせた。しかし当の雛田は気を抜かれたような顔で、

「君みたいなの若い人が、よくご存知ですね？」

萌黄は頭をブルブルと振った。

「わたし、お笑いには無茶苦茶ウルサイんです。そんなわたしにとってオールタイムベストが、カゲヒナタさんなんです」

雛田は照れたように頭を掻くと、イタツと叫んだ。コブに触れたのだ。

「カゲさんはお元気ですか？」

雛田の表情がふっと陰った。

「影松豊は」清香が応えた。「わたしの父は亡くなったの」

萌黄の口は笑ったまま固まった。

「——ううん、殺されたの。長野防衛隊に」

応接室の温度がスーッと下がった。

萌黄は息を止めて絶句した。

(…：清香さんとカゲさんは、親子やったん!?)

同じ名字なのに、まったく結びつかなかった。彼女の公式サイトにも書かれていかなかったから、おそらく情報を伏せられていたのだろうが。

沈黙の霧を野宮が払った。彼は立ち上がると、

「心からお悔やみを申し上げます。カゲヒナタといえば、

私のような者でさえ知っている有名人だ。文字どおり一世を風靡したコンビでしたからな」

雛田が頭を下げた。

「——だがその長野防衛隊というのは一体何なんだ？

私はニュースで聞きかじったただけだが、高速道路をバリケード封鎖したり、テレビ局を占拠したりと、過激なことばかり繰り返して、テロリストを日本から追い出せと激しく主張している。どうやら砂状化現象の原因を、外国人テロリストによる細菌攻撃だと思い込んでいるらしい。それ以上のことは不明だが」

「じゃあ影松の死はどう説明されるんですか？ 運悪く外国人テロリストに間違われたと？」

雛田が悔しそうに吐き捨てた。

「だから不明と言っている」

その時、テーブルの上の電話が鳴った。野宮が受話器を取り上げた。

「……ナニ？ ……そうか、判った」

受話器を戻した野宮は、鋭い目で雛田を見た。

「正門前であなたがたを襲撃した連中が、たった今、口を割ったそうです。自分たちは長野防衛隊の隊員だと」

「なんで俺たちの行く先々に現れるんだ？ あれほど見つからないよう、苦勞に苦勞を重ねて逃げてきたというのに」

雛田は悔しさに拳をぐつと握りしめた。

「あなたがたがここに来るのを、連中は予測していたようだと、警備本部から報告がありました。その時の映像を、もうすぐ見ることができます」

野宮の言葉が合図になったように、ドアがノックされ、迷彩服の男が入ってきた。

「シュウさん」

萌黄が名を呼ぶと、シュウは目だけを彼女に向け、わずかに黙礼した。

「助教授、映像ディスクです」

「そのテレビに差し込んでくれ」

シュウは持ってきた一枚のディスクを、壁に掛けられたプラズマディスプレイの挿入口に差し込んだ。

「私が頼んで、正門に設置された監視カメラ映像を編集してもらったのだ」

画面に表通りの俯瞰映像が映った。正門壁際にある監視塔から撮影されたものだ。シュウが口を開く。

「長野防衛隊を名乗る連中は、我々監視側の目を見事に欺いていました」

シュウがリモコンを操作すると、画面が二分割された。

「右側の映像。通りの向こう側を携帯電話で話しながら歩く中年男性に注目してください。左側の映像では、犬を連れて歩いている老人に。このふたり、じつは同一人物です」

一同は画面に目を吸い寄せられた。しかし萌黄には違う人物にしか見えなかった。

シュウは双方を静止画にし、拡大した。ふたりの手首が大写しになる。どちらの手首にもカラフルなミサンガが付けられていた。

「歩きかたを分析した結果、同一だと判定されました。他にもあります」

今度は走り過ぎる車が分割した画面に現れた。同じ車種で同じ色をしている。

「二十分おきに通りを往復していました。ご丁寧にもナンバープレートがそのつど変えられている。我々の監視ソフトの特性を熟知しているような、巧妙な目の眩くらましかたです」

「君たちの警備本部の見解は？」

野宮が訊ねると、シュウはポケットからメモを取り出し、それを読んだ。

「彼ら長野防衛隊の連中は、年齢も性別のバラバラで、およそ軍事訓練の経験もないような者ばかりです。にもかかわらず、綿密に統率された集団のように、鮮やかな

行動を見せました。極めて不可解であるとして、本部ではまだ結論が出ておりません」

「誰が統率している？」

「それも不明です。逮捕された連中は知らないの一点張りです」

以上ですと言って、シユウは退出していった。

「やれやれ、謎はますます深まるばかりか。みんな、ソファに腰かけて話そう」

野宮はリアルたちに着席を促した。萌黄、伊里江、清香が並んで腰かけ、萌黄のすぐ脇に炎少年の車椅子が移動した。雛田は野宮の隣りに座った。

「先生サマ。僕にはよく判らないんだけど、そうまでして清香の命を狙う目的は何なんですかい？」

「決まってるじゃないか。リアルだからだよ」

「そのリアルってのが、さっぱり——」

「もう一度話さにゃならんのか。やれやれ」

野宮は手短にさつき話した説明を繰り返した。話が進むにしたがって、雛田の口は開いていき、終わった時には顎が外れるほど大きく開かれていた。

「ばく、爆発するう？ 人間が？」

「嘘ではないよ。北海道もそうして吹き飛んだのだ」

「待ってくれ、先生。人間の身体が砂になっちゃう理由は、俺たちがたった一週間前に、即席で作られた偽物だ

からって言うのかい？」

「まあ、そういうことだな」

雛田は自分の手を広げ、しげしげと見つめた。

「この身体はコピー……。クローン人間みたいなものなのか」

「左右反対のね」

雛田は頭を抱え、うーんと唸った。

「わたしたちのようなりアルの人は、どれだけ集まったのですか？」

清香が質問した。野宮は立って行って、部屋の隅のホワイトボードを引っ張ってきた。そしてマーカーのキヤップを外すと、ボードに名前を書き始めた。

光嶋萌黄

駿河炎

影松清香

×ハモリ

×（十七歳の男性・秋田）

×（二十六歳の女性・神奈川）

×（四十一歳の男性・山口）

「×印は……」

「そう、亡くなられたかただ」

「この伊里江さんは含まれません。自力で来たから」  
萌黄が補足すると、清香は驚いた顔をした。

「すると、この世界にはまだあと五人のリアルがいるんですね？」

「その通り。一日も早く彼らを捜し出さねばならん」

その時、炎少年が『スゴい！』と叫んだ。全員が少年を見たが、彼の目はサングラスの奥で閉じたままだ。視線を追うことはできない。

「どうしたの？」

萌黄が訊ねると、

『あれだよ、ほら。壁のテレビ』

全員がプラズマディスプレイを見た。そこには、先ほどから正門前の映像が流れたままになっていた。

画面ではボンネットの潰れた車が煙を吐いていた。

野宮がリモコンを持ち上げ、映像を巻き戻す。

暴漢に捕われた清香の姿が現れた。雛田は車に連れ込まれようとしているのが、ほぼ真上からしつかり撮られている。

その時、つむじ風のように駆け寄るふたつの影。萌黄と伊里江である。伊里江は清香を救い、萌黄は車を破壊した。

「凄まじいな……」野宮は感嘆した「これほど増大しているとは」

「増大？」

野宮のつぶやきを萌黄は聞き咎めた。

「気づいてないのかね？ リアルのエネルギーは日一日と高まっている。おそらくリアルパワーもそれに比例して増大しているのだ」

『僕にもできるかなあ』

炎少年が羨ましそうに言った。

「とんでもない！ リアルパワーのことはまだよく説明されておらんのだ。むやみに使うのは危険だぞ」  
助教授は少年を叱ると、映像の再生を止めた。

「なあ、先生」

再び、雛田が口を開いた。

「ここに集められたリアルたちは、これからいったいどうなるんです？」

「まだ言ってなかったかな。彼らは全員、元の世界に送還されるのだ」

「えっ!!」

雛田はこれまでに最大の驚きを身体で表現した。

#### 4

驚いたはずみで、雛田はソファから床にずり落ちた。笑いを誘う転げかただったが、ギャグではないようだ。

「そもそもそれは、つつつつまり——リアルの間人は、この世界からいなくなっちゃうってことですか？」

野宮は得意げに頷いた。

「部品と資材が一部、未到着で困ってるんだが、明日には届くでしょう。そうすればリアルの世界へのトンネルが開通します。これができるのは世界広しと言えど、我が大学のエネルギー工学研究所だけです」

「わたしの父が！」清香が叫んだ。「父の生きている世界に帰れるんでしょうか？」

「もちろんですとも」野宮は満足そうに笑みを浮かべる。「感動の対面がトンネルの向こうで待ってますよ」

清香は胸の前で手を合わせると、目に涙を浮かべた。

時報が午前十一時を教えた。

お部屋にお連れしようと、野宮は腰を上げた。

「炎クンに影松クン。悪いが君たちの居室はここから少し離れている。時間がないので急いで——」

「先生、わたしが案内します」

萌黄が言うと、野宮はホツとした顔で、

「助かるよ。私は正午に会議が入ってるのでな。また口うるさい副社長のご機嫌を取らねばならん」そして残った雛田に顔を向け、「あなたはリアルじゃないので、私についてきてください」

「はあ」

雛田は力なく返答した。

居室のある建物——リアル館と呼ばれている——へ行く前に、炎が母親を見舞いたいと言ったので、萌黄と清香も付き合うことにした。

三人は廊下で和久井助手を見つけると（この人はいつも必要な時に現れる）、彼女の案内で保健室へと向かった。

母親はベッドで深い眠りについていた。診察した医者  
は、

「かなり無理をされたようだ。なあに、丸一日ゆっくり休めば快復されるだろう」

『よろしくお願いします』

ボディ・ランゲージが不可能な分、炎の言葉には、母親を氣遣う少年の気持ちがかもっており、医者も心を動かされたようだった。

空には雲ひとつない。すべて吹き飛ばされたようだ。キャンパスを歩いていく。すれ違う作業員たちが萌黄に気がつくと、口々に声をかけてきた。

「お嬢ちゃん、お仲間かい？」

「完成まであと一歩だ。待っててくれよ」  
萌黄は頭を下げてそれに応えた。

「萌黄さんは人気があるのね」

「いえ、ただわたしの立場に同情してくれてるんです」

「そんな風には見えないわね。あなたには人を惹きつけるものがあるのよ」

萌黄は清香の言った意味が判らなかつた。わたしが誰かを惹きつける？

「とんでもないです！ わたしなんて万年引きこもりのパソコンオタク少女で、高校も大学も出席率悪いし」

「そうね、まだお会いしたばかりで、わたしはあなたのことをよく知らない」

清香は萌黄の正面にまわつた。

「でも判るのよ。わたしは演奏活動を通じて、数多くのカリスマと呼ばれる人たちを見てきたから。あなたにはね萌黄さん、どこかカリスマチックなところがある」

「からかわないでください」

萌黄は唇をゆがめ、激しく首を横に振つた。

すると横から炎が近寄り、

『僕も清香姉さんに賛成。萌黄姉さんはカリスマだあ』

「カリスマのホントの意味、知ってて言うてんの？」

萌黄は意地悪い口調で切り返した。

『たったいま、ネット辞書で調べたよ』

便利なベッド、いや車椅子である。

萌黄はたまらず顔を伏せた。

「ごめんなさいね。でもからかってるんじゃないわね」  
清香がよく通る声で言った。そして彼女は、一週間前に突如として起きた左右反転現象以来、心細い日々を送ってきたことを告白した。

「駆けつけてくれたおじさまには感謝してもし足りないくらい。でも、わたしの陥った状況は、どんなに説明してもおじさまには理解してもらえない。……だからわたし、萌黄さん、あなたや炎くんに会えて本当にうれしいの。事情が判っただけでなく、同じ立場にいる仲間なんですもの」

萌黄も同感だった。むんや久保田には申し訳ないが、境遇が同じだからこそ共有できる気持ちがある。

『元の世界に帰るのは、明日かあ』

炎がため息混じりに言うと、萌黄は相づちを打った。

『こつちのお母さん、独りぼっちになっちゃうな』

そのつぶやきは、萌黄に苦い感情を呼び起こした。

——この世界を救うため、自分たちは帰還しなければならぬ。本当は伊里江兄が捕まるのを見届けてからにしたいが、そんなわがままは許されそうにない。もちろん帰りたい気持ちは目いっぱいある。しかし帰るということは、こちらの世界のむんや久保田とさよならするということだ。苦労を分かち合ったヴァーチャルの友達たちと……。

同時刻——。

ひとりの老人があぐらをかいて座っていた。

眼前には、どこまでも緑の濃淡がうねうねと広がっている。すべて苔こけである。池の水がその間を縫い、木々がそこかしこに植わっている。

老人はもう二時間もじっと座ったままだ。双眸は飽きることなく風景を眺め続けている。

ようやく老人は腰を上げた。立ち去るつもりではないらしく、しばらく細い道をとぼとぼと歩いていたが、また意に沿う場所が見つかったようで、風景に目を走らせながら、ゆつくりと腰を降ろす。

「オイ、爺さん」

ふいに頭の上から声がした。老人は手をかざして空を仰ぎ見た。すると枝の上にひとりの若者がいた。

「なんや、カラス天狗か」

そう言うと、老人はまた視線を前に戻す。

「天狗じゃない。人間だ」

若者はひよいと枝を離れ、身軽に地上に降り立った。

「人間なら用はない。とつとと去いね」

老人は手の平をひらつかせ、追い払う素振りをする。

しかし若者はそんなことは気にもせず、老人に近づくと、

「朝からずっと座ってるけど、いったい何を見てるんだ？」

「あん？ 庭に決まっとる。他に何かある」

「庭って、この『ナウシカ』に出てくる腐海みたいなフワフワか？」

「なう鹿？」

「知らなきやいい」

「フワフワで、お前、これは苔やぞ」

「苔っていうのか」

「苔も知らんとは、さてはお前、都会の子やな」

「大阪生まれの大阪育ちだ」

「そのわりには、訛なまってへんな」

「知らないかな。ニートっていうんだ」

「二兎？」

「ようするに、家から出たことのない人間だ。俺はテレビだけを見て育った」

「ふむ。そんな子がなんで木に登つとつた？」

若者は枝を見上げた。ゆうに地上五メートルはあつた。

「さあてね。木登りの才能が目覚めたんだろ」

若者はスイと水たまりでも飛び越えるように軽く跳躍した。だが次の瞬間、彼の手は十メートル先の枝にひっ

かかっていた。

「おい、ここは西芳寺さいほうじつちゆうて、世界文化遺産にも指定されとる寺やぞ。あんまりてんごすなや」

若者は逆上がりで枝に尻を落ち着けると、含み笑いを浮かべながら老人を見おろした。老人は顔をしかめ、

「やっぱりカラス天狗や」

「違うって」

「お前、ずっとここに住んどんのか？」

「そんなわけないだろ。昨日家を出てきた。物心ついてから初めての外出だ」

「当てはあるのか？」

「目的地かい？ あるよ。京都工大つととこさ」

「あつはつは。そりゃあいい。わしもこれからそこに行くつもりだ」

「えっ！」

若者はバランスを崩し、苔の上に落ちそうになったが、どうにか体勢を立て直し、老人の横に降り立った。

若者は射るようなまなざしを老人の禿頭に注いだ。しかし喉元まで出かかった言葉を飲み込むと、

「爺さん、ここに来たのは初めてか？」

「いや、わしはこの裏山の庵いおりに四十年間住んどって、この寺には週に二、三度は来る。そやからここはわしの庭みたいなもんや。見飽きるぐらい見てきた」

「なのに、さつきから珍しそうに見てるな」

「珍しそうに見えたか？」

「見えた」

老人は両手を頭の後ろに組んだ。

「この庭園が一夜にしてひっくり返ってしもたからな」

「ひっくり返った？」若者は前を見た。「どこがどんな風に？」

「わしの記憶にある庭園とはまったく違う。左にあった木が右にあるかと思えば、右にあった石組みが左に動いとる」

「誰かのイタズラか」

「そうやない。まるで鏡に映したように左右が入れ替わっとるんや」

「それで腹を立ててたってわけか？ 馴染みの庭を変えられたから」

「ちやうちやう」老人は首を横に振った。「壊されたんやったら腹が立ったけどな。見慣れた風景が一夜にして見慣れぬ風景になったんやぞ。こんなおもしろいことあるかい。また一から眺めて楽しめるやないか」

だははははと老人は痛快そうに笑った。

「こいつはまたエラく前向きな爺さんだな」

若者は呆れて言った。老人は笑いながら、

「なんの、左右が入れ替わったのはここだけやないぞ。」

わしの庵も、山や川の形も、何もかも一切合切や。こんな愉快なことがあつてたまるか。だはははは」

若者はしかし笑いもせず、老人の目線まで屈むと、

「爺さん、アンタ何者？」

と訊ねた。

老人はそれに応えず、欠伸をひとつすると、どっこいしょと立ち上がり、尻の土をパンパンと払い落とした。

「もう昼時だ。わしは握り飯を持ってきとる。よかつたらいつしよに食うか？」

6

「カラス天狗、名を何という？」

「人間だつて。——小田切おだぎりハジメ」

「ハジメか」

「元気の元と書く。……なんでオイラこんなにしゃべつてんだろ？ 今日ほもう一年分の文字をしゃべったぞ」

「だはははは。きつと空気がいいせいだろう」

確かにふたりのいる西芳寺は、澄んだ空気に包まれている。老人は笑い、包みから取り出した握り飯をハジメに持たせた。

「今日からお前はゲンだ。元気のゲン」

「勝手に名前変えんなよ。——で、爺さんは？」

「ビッグジョーク齋藤<sup>さいとう</sup>」

「へ？」

「お新香も食え」

「違う。——そのビッグ何とかつての、名前か？」

「訊かれたから答えた」

「本名なのかつての」

「本名なら、齋藤道節という」

「じゃあそのドーセツでいいんじゃないの」

「わしゃ芸術家やぞ。硬すぎて趣味に合わんわ」

「芸術家なのか、爺さん。アーティストってやつか」

「ことさら英語で言う必要はあらへん」

「ビッグ何とかつて英語じゃないか。ワケわかんね」

ビッグジョーク齋藤はお茶で握り飯を喉の奥に流し込むと、問わず語りに話し始めた。

「この山に住んで四十年。わしも年をとった。庵を結んだ頃のわしはまだ血気盛んな四十歳でな。ようやっと作品を認める奴が世の中に出てきよった。日本よりも主にアメリカやイギリスの白人どもやがな。」

わしは彫刻をやつとる。木を彫んねん。昔は街中のアトリエに住んどったが、人と付き合うのがイヤになり、思い切ってたんだ。世の中にはくだらん人間が多過ぎる。どいつもこいつもみんなくだらん。あんまりくだらんなので人里離れた山間に居を構え、誰にも会わんように

なつたんや。

以来、最低限の人付き合いでやってきた。ネット社会やから、連絡はメールでできるし、作品の引き渡しは、指定の場所に置いとけば勝手に持っていきよる。個展もまあ信用のできる連中に任せとるんでな。

ひとつ処から動かなくなった理由は他にもある。わたしは子供の頃から旅ばかりしておった。親が旅行好きだったこともあつてな。高校を出るとひとりで出かけるようになり、旅、バイト、旅の繰り返しでな。……あの頃は毎日が刺激と冒険に満ちあふれていた。自分の感性に鑿のみを当て、音を立てて磨かれていくのが楽しくてしやうがなかった。わしは地球上に存在する三分の二の国に足跡を残してきたぞ。だはははは。

しかしまあ、旅といつてもいいこと尽くめではない。旅費を稼ぐために短期バイトでその地に留まるから、人間関係と無縁ではいられなくなる。そうなるやと醜いものに接する機会も増える。うんざりするやうな目にも遭う。荷物を運ぶ仕事を手伝わされたら、実は闇ルートの武器売買で、待ち構えていた警察の包囲網を間一髪で脱出したり、言い寄ってきた女を袖にしたら、これが街の顔役の娘で、そいつの取り巻きに宿ごと火をつけられ、這々の体で逃げ延びたり。だはははは。

そやからそのうち旅にも倦うんだ。たいがいの場所は訪

れたから、もうあとはそのコピーかバリエーションでしかない。見るべきものは十分に見てきた。

もうどこへも行かん、誰にも会わん。そうやって過ごした四十年やった」

いつしか話に引き込まれていたハジメは訊ねずにはいられなかった。

「寂しくなかったのか？ 家族は？」

「家族か……。娘の節子が大阪に嫁いどるが、生まれた頃に見たきりで会ったことがない。ごくたまにメールを送ってきよるが返事も出さんわしは親として失格やな」

「人間嫌いはオイラも同じだ。くだらない連中のウダ話を聞いてると殴りたくなる」

「わしも殴ってみるか？」

「爺さんの話は面白いよ」

「そうか。まあくだらん人間の相手をしていると、自分の価値が下がるし鑑識眼も曇るからな。感性が鈍ってしまふ。他人と同じものが好きで、他人が褒めた映画だけ観て、他人が美味いと言ったものだけを食う。そんな奴らにわしの作品の値打ちが判るはずもない。

三十五歳の時、わしは間違うて失敗作を個展に出してしもたことがある。なんとこれが某有名雑誌で激賞された。苦々しくもわしの名前が一躍世に出るきっかけになつてしもた。そしたらどないや、会う奴会う奴が『あ

れは素晴らしい。傑作ですね』と言いよる。作品など観  
もせず、三流批評家の文章だけを鵜呑みにしてな。

ハジメよ、お前やないけど、わしはそんな愚にもつか  
ん奴をこの拳で叩きのめしたことがある。ちよつとした  
事件になったな。それがわしに山ごもりを始める踏ん切  
りをつけさせた」

「ふえー。爺さんもやるな」

「そんな時はまだジジイやない。——よわい齡重ねて八十年。も  
うこの世に観るべきものは何ひとつないとあきらめとつ  
た。ところがだ」

老人はハジメに顔を寄せた。

「ある朝、目覚めると新たな世界が広がっておった。見  
慣れたはずなのに新鮮な世界が。ありとあらゆるものが  
魅力を放ち始めたんや。ハジメよ。『デジャ・ヴユ』と  
いう言葉を知ってるか？」

「聞いたことがあるな。確か、行ったこともない場所な  
のに初めて来た気がしない……」

「その通りや。前世で訪問した記憶が蘇ったという解釈  
もあるそうや。ほんなら『ジヤメ・ヴユ』は？」

「蛇の目？」

「ちやうちやう。ジヤメ・ヴユはデジャ・ヴユの反対語  
や。見たことがあるのに違和感を感じるつちゅー意味や。  
つまり今のわしや。神さんは老い先短いわしを哀れんで

くれたんか、最期にこんなプレゼントをくれはった。左と右が入れ替わっただけで、世界がこれほど魅力的に見えるとは、さすがのわしも想像がつかんかったわ」

ビッグジョーク齋藤は感極まって膝を叩いた。

「爺さん、さつきあんたも京都工大へ行くと言ったな」

「ああ、ネット広告を見てな。わしがこうなった理由が判るなんて書いとった。他にも仲間がおるとかも」

「じつはオイラもそうなんだ。左と右が入れ替わった」

齋藤は驚きの目をハジメに向けた。

「ほう。そいつは初耳や」

「いま初めて言った。だからオイラ、その大学に行く途中だったんだ。爺さんを見つけたのは」

「よう見つけたもんやな。苔の中に埋まってる、苔の生えたようなわしを」

「同じにおいがしたんでね」

ハジメは目を庭園に戻した。鹿威しおどしのコーンという音が辺りにこだました。

「爺さん、オイラ、ニートだって言ったのは嘘だよ」

「ん？」

「本当は少年刑務所から脱走してきたんだ。オイラ、人を殺めたんだ」

「ふーん」

「あんまり驚いてないな」

「いや、驚いとる。そんな風には見えへんけどなあ」

「見えない奴のほうที่危ないんだよ」

ハジメは足許の苔を触りながら、話を続けた。

「バイト先の店長を刺しちゃったんだ」

「殺すつもりやったんか？」

「みんなそう思ってる」

「なるほど。それで刑務所か」

「先週は職員を殴っちゃまって、ずっと懲罰房に放り込まれてた」

「パワーがありあまつとるんやろ」

「そんなんじゃない……そうなのかな」

「左右が入れ替わったのは、いつやった？」

「ちようど一週間前の明け方だ。オイラが懲罰房に入れられた翌日だったな。トイレをしようと思ったら、反対側にあっただんでビックリした。職員らのイタズラかと思っただけど、そんな馬鹿な話はないし」

「明け方か。わしと同じ時刻かもしれん」

「それからは悶々と日々過ごしてた。オイラ以外の連中は、世の中が鏡の中みたいになったというのに、みんな普通に生活してる。オイラの頭だけおかしくなったんだと思っただね。だからガンガン壁に頭を打ちつけてやった。

元に戻れーって願いを込めて。ほら、これがそのときの傷」

ハジメは前髪をかきあげた。

「ほう」

「結局、脳震とう起こして医務室へ運び込まれたんだけどね。気がついたらベッドの上にいて、周囲に見える文字も全部裏返しさ。悲鳴を上げそうになったっけ。その時たまたまそばにあったネット端末を見ると、爺さん、あんたがさつき言ってた広告が映ったんだ。オイラは無我夢中で画面の文字を読んだ。何しろ読める文字だったからさ。すぐにキーボードから名前を打ち込んだ。オイラにはメールアドレスなんてないから、連絡先は刑務所にしといた。そしたら、おとつい返事が来たんだ。爺さんにも来たんだろ？」

「来た」

「オイラには広告主が救い主に思えたね。だから目眩が治まらないと嘘言って、そのままベッドから離れなかったんだ。大成功。思った通りオイラ宛の返事がその画面に現れた。救い主、いや導師はオイラに大学まで来れば助けてやると言ってくれた。うれしくてホツとしたけど、その直前、国の役人が『リアルを殺せ』なんてテレビで叫んだんで、オイラは急いで逃亡しなきゃと焦った。だから今朝、掃除当番で庭に出るなり、刑務所にさよなら

したんだ」

「どうやって？」

「壁を飛び越えてさ」

ハジメは両足を揃えると、軽くジャンプした。だが彼の身体は境内のどの木よりも高く空に舞い上がった。齋藤が見上げる中、彼が降りてくるまでにたっぷり十秒はかかった。

「お前、ホンマに人間か？」

「これも導師からもらった能力かもしれない。判らないことだらけだけど、その大学に行けばすべての秘密が解明されるらしい。だからオイラ、忍者かスパイダーマンみたいな、屋根から屋根、木から木に飛び移って、ここまで来たのさ」

「わしにも飛べるかな」

「できるんじゃないの」

齋藤はよっころしよと立ち上がったものの、首を横に振った。

「よしておこう。骨折したら大学まで歩けなくなる。この世情じゃタクシーも滅多につかまらんしな」

「よし、オイラがおぶって行ってやるよ」

ハジメは背中を向けてしゃがんだ。

「やめてくれ。恥ずかしい」

「誰も見てないって。それにオイラもひとりで行くより

心強いからさ」

ハジメは背中に齋藤を背負った。

「軽いな、爺さん。それじゃ行くぞ！」

ハジメの足が地面を蹴ると、西芳寺の境内がアツという間に沈んだ。齋藤にはそう思えた。

「うわっ、そない高う飛ばんでもええ！」

萌黄は清香と炎少年を自分の部屋に招待し、お茶を振る舞っていた。

とりたてていま他にすることもない。ただ転送装置の完成を待つばかりなのだ。

伊里江はパソコンデータを整理したいと、早々に自室に戻った。

清香と炎の話は興味深かった。元より境遇の異なる三人であるから、リアルになる前の話も、なった後のも、互いに珍しいことばかりである。話に没頭すると彼女らは時間を忘れた。

ふわり。

開けている窓のカーテンが風にふくらんだ。

萌黄の髪が、ざわっと逆立った。

（——！）

振り向くと、窓の外、はるか地上をひとり駆けていく、迷彩服の後ろ姿があった。

(クソツ、なんてふざけた世界だ！)

トニーは自慢の金髪を風に揺らしながら、小走りでキャンパスを横切ろうとしていた。

(あんな小娘が空を飛んだり、車を足で破壊したり。まるでファンタジー映画じゃないか！)

この男は萌黄を見張る任務を怠ったということで、その役を解かれた。彼女はいきなり窓から飛び出したのだと言いつても、副長は聞く耳を持たなかった。

「それなら、小娘が窓枠に掛けた足を撃ち抜くべきだったな。……利根崎、幸運だよ、お前。ここに真崎隊長代理がいたら、お前、撃たれていたかもしれないぞ」

利根崎というのが彼の本名である。彼が空を飛んだ萌黄を追って、正門にやってきた時、すでに戦闘は終わっていた。しかし彼は大きなショックを受けた。とても人力でやったとは思えない車の変わり果てた姿に。

(リアルは、もはや俺たちリアルキラーズの予想をはるかに超えた存在になりつつある。巨大な脅威になりつつある。俺たちは転送装置の完成など待たず、早いところあいつらを始末すべきなんじゃないのか？ さもないと今に殺すこともできなくなるぞ。いやもうすでにできない

かもしれない)

利根崎の背筋にぞくりと悪寒が走った。  
と、その時。

「どけーっ！」

大きな声がビリビリと空気を震わせた。

利根崎が地面に落ちる影に気づいた時は、すでに遅かった。

「うわっ！」

人が空から降ってきたのだ。利根崎は地面に転がり避けるだけでせいっぱいだった。

ドドーンンッ。

地響きと共に、砂煙が渦を巻いて舞い上がった。

利根崎は自分の身体が宙に浮くのを感じたが、砂埃が激しく、目を開けられなかった。そして、上下が目まぐるしく変わったかと思った時、いきなり水面が顔を打ち、冷たい水が全身を包んだ。

「ペッペッ。たまらんな」

口に入った砂を吐き捨てながら、齋藤は手をついて地面の上にむっくりと起き上がった。彼を背負ってきた小田切ハジメは、すぐそばで仰向けになって倒れている。

「おいハジメ、どうもないか？」

訊ねるとそれに呼応するように、ハジメは顔に澁面を

作ってみせ、両手で膝をかかえた。

「イッターッ！ やっぱ、無理だったか！」

齋藤は這うようにして近寄ると、その手でハジメの脚をつかんだ。

「バカ、ジジイ、痛いって言ってるだろ！」

齋藤は構わず、脚をコキコキと動かす。そして、

「骨折はしとらんようやな。まったく無茶しおって」

「だって壁が高いんだし、あれぐらい飛ばないと越えられないだろ」

「飛び過ぎや。だいたいハナっから表の門をくぐらせてもろたらええんや。それをカツコつけてからに」

「オイラは脱走犯だぜ。正面からコンニチワなんつたら、誰にも会わないうちに刑務所へ逆送致だ」

「——あのお」

突然、女性の声が割って入った。ふたりはそちらを見た。

「どちら様でしょうか？」

萌黄だった。

齋藤とハジメは互いに顔を見合わせた。

「敵やないみたいやな」

言うど、齋藤は改めて萌黄を見上げ、微笑んだ。

「わしらはご招待を受けて、参った者ですわ」

「ひよっとして……リアルのかた？」

齋藤は「ほう」とつぶやき、膝の砂を払い落としながら、ゆっくりと立ち上がった。

「我々はいきなりメイン会場の受付の前に降り立ったわけですか、娘さん。——いかにも、我々はリアル向けの招待状を受け取った者です」

萌黄はうれしさを満面にたたえて、ふたりにお辞儀した。

「ようこそいらっしやいました。私は光嶋萌黄、リアルです」

「なんと、こんなに早くお仲間にあえるとは！ ハジメの蛮勇もあながち無駄ではなかったようだ」

齋藤は振り向いたが、ハジメはまだ痛そうに膝をさすっている。

「萌黄さんとやら。わしはビッグジョーク齋藤と申す」

「ビッグジョーク齋藤さん？」

「そしてこ奴は、小田切ハジメ。ハジメは元気の元と書きます」

「お孫さんがリアルなんですか？」

齋藤は「ん？」と言葉を詰まらせたが、やがて、だはははと豪快に笑った。

「こ奴は孫やない。道中たまたまいっしょになっただけですわ。そんでもって——」

齋藤は胸を張った。

「こ奴も、わしも、リアルや」

萌黄は目を丸くして、老人と若者を交互に見比べた。

噴水の水の中から顔を上げた利根崎は、萌黄が見つけると、激しい怒りで顔を真っ赤にした。

(コイツがいる限り、世界は救われない！)

利根崎は腰からピストルを抜くと、照準を合わせるのももどかしく、萌黄に対して引き金を引いた。

9

(リアルは自覚がなければ防衛本能が働かない。今なら確実に殺れる！)

萌黄はまったく気づいていない。

利根崎は勝利を確信しながら、引き金を引いた。

パンツ。

発射された銃弾は、狙い誤ることなく、彼女の胸へと直進した。

ドンツ。

(何っ?)

利根崎と萌黄の間に黒い影が走った。影はまるで独楽のように高速で回転したかと思うと、たちまち砂塵を蹴立てて、自ら制動をかけた。

ぼやけていた輪郭が明瞭になると、影はひとりの男の姿になった。黒のTシャツに黒のジーンズ。服装だけでなく肌も黒く日焼けしている。身長は百六十五センチほど。脱色した灰色の髪の下は、童顔と言っている容姿で、細身だが短距離走者を思わせる均整のとれた身体は、実際よりも彼の背を高く見せていた。

小田切ハジメである。

砂塵が収まると、彼は左の手の平を開いてみせた。銃弾が湯気を立ててそこにあつた。

ハジメは切れ長の目をさらに細めながら、利根崎に近づいていった。そして噴水の縁に片足を乗せると、指先につまんだ銃弾で、腰を抜かしている利根崎の顔をつるりと撫でながら、

「こいつをお前の脳みそに振ねじ込んでやろうか？」

そう言って、ぐいぐいと彼の頬に押しつけた。

利根崎は泣き出した。精神に崩壊をきたしたような号泣だった。

「ハジメ」 齋藤が呼んだ。「勘弁してやれ」

ハジメは我に返ったように顔を上げると、また利根崎を睨みつけ、銃弾を彼の口に押し込んだ。

「食えよ」

利根崎はアウアウと頷き、ごくりと銃弾を飲み込んだ。「ハジメ！」

再度呼ばれて、ハジメは興味をなくしたように利根崎を放免すると、子供のように足裏を擦りながら齋藤のところに戻ってきた。

銃声を聞きつけた迷彩服たちが大勢やってきた。

「どうした？」

副長クラスらしいひとりが訊ねた。齋藤は一步前に出ると柔和な声で、

「いやあ、あの人は何を勘違いされたか、わしらに威嚇射撃されましたな。さいわい銃弾は逸れてくれたようやが」

副長は齋藤をしげしげと見ながら、

「見慣れない顔だが、あんたもリアルか？」

「そうです。それでコイツは」ハジメを指さし「わしの孫です」

「検査はもう受けたのか？」

「いいえ、これからそちらの娘さんの案内で行くところです」

齋藤は萌黄を見た。

「なら、早く行け」

副長はそう言うと、利根崎のそばに取って返し、

「馬鹿者が！ 隊長代理の命令を忘れたか！」

現在、リアルキラーズはリアルに対する発砲等を禁じられている。副長は他の隊員に命じて利根崎を噴水から

引き上げると、彼を引きずりながら散開していった。

萌黄はすっかり度肝を抜かれて立ち尽くしていた。彼女の後ろには、清香と炎も駆けつけていた。清香は萌黄の両肩に手を置いた。

「大丈夫？ 怪我はない？」

「は——はい」

萌黄は今見た光景を反芻はんすうした。

ハジメは目にもとまらない速さで手を伸ばし、バックハンドで銃弾をつかんだのだ。回転したのはおそらく銃弾のスピードに合わせるためだろう。

彼が防いでくれなかつたら、萌黄は確実に銃弾を浴びていた。そして、今度こそ間違いなく命を落としていただろう。

萌黄はぞつと背筋を凍らせた。

ぞつとしたのはそれだけではない。ハジメという男、まだ十五、六くらいだろうが、彼の放つ空気に、年齢に似合わぬ、キナ臭いものを感じたからだ。

萌黄はおそるおそる前に出た。

「ハジメさん、あの、助けてくれてありがとう」

萌黄の礼に、ハジメはあさつてのほうを向いて、鼻を鳴らしたただけだった。

「さて、萌黄さん。わしらをその検査とかに連れてつてもらえますかな」

齋藤の穏やかな声に促され、萌黄はこちらですと講堂への道を歩き始めた。

ハジメは齋藤の肩を小突くと、小さな声で耳打ちした。「おい爺さん。アンタ、前科者のオイラを孫に仕立てて、庇<sup>かば</sup>うつもりか。よけいなお世話だぞ」

すると齋藤は、

「娘を助けて、今度は逃亡を手助けするわしの心配か。見かけに似ずお人好しだな、ハジメは。さすが我が孫」

「おい！ オイラはマジメな話を——」

「わしの一人娘、節子の長男。芸術家のわしに弟子入りしたくて、わしを訪ねてきた。それでええやないか。説明の面倒が省けるわ」

齋藤は、だははははと笑うのを忘れなかった。

正門。

警備中の迷彩服たちが会話を交わしていた。

「またリアルが現れたらしいぞ。それもふたり」

「どこから湧いたんだ？ 他の門からは、通過したという情報は入ってないぞ」

「本当か？ ——ん？」

ひとりが額に手をかざして、前方をすかし見た。

正門の前に、男がひとり、ぽつんと立っている。

「おい、そんなところでぼやっとしてると危ないぞ」

声をかけたが、その男は周囲を警戒する様子もなく、つかつかと門に近づいてきた。

迷彩服たちは肩に下げた銃を男に向けた。すると男は両手を前にかざして、こう言った。

「すみません。怪しい者ではありません。ここへ来るように連絡を受けたものです。どうか、私を招待してください。さつたかたにお取り次ぎください。」

——ひいらぎたくみ柘拓巳たたくみが参りました、と」

## 10

検査の結果、齋藤とハジメのふたりは、リアルであることが正式に認定された。

「それはええことなんか、悪いことなんか？」

なんと齋藤老人は、笹倉長官の記者会見を見ているかった上に、そんな騒ぎがあったことも知らずにいた。

「お孫さんもご存知なかったのですか？ えーっと、齋藤ハジメさん」

「いや——知ってた。街のネットテレビで見て」

野宮助教授は、やれやれと嘆息した。

「この二〇一四年に、まだネット社会と無縁の人間がいるんですなあ」

「カチーン」

「ん？」

「あのな、先生」齋藤は腰に手を当てて、野宮の前に出た。「わしは彫刻家や。鑿のみと槌つちとええ木があればそれでええんや。ネットなんか必要あるかい。そんなもんの前に座つて動かへんから、腹も出るんや」

今度は野宮が聞き捨てならないという顔をした。大きな腹を揺すりながら。

「芸術家おーいに結構。ですが、あなたの命にかかわることなんですよ。あの記者会見のせいで、日本中至るところで魔女狩りもどきのリンチや騒ぎが横行しとるんです。万一、あなたの身に——」

「あいにくやな。人里離れた山の中で暮らすわしには無縁の話や。むやみに栄養価の高い食い物ともな」

萌黄は端で見えておかしうてしようがなかった。

野宮は自分がからかわれていることに気づいていない。ビッグジョーク齋藤。彫刻家。名前だけは聞いたことがあったが、姿を目にするのは初めてだ。

身長はハジメより五センチほど小さい。広い肩幅に太い手足。八十歳の身体は見るからに頑健で、腰はいささかも曲がっていない。髪の毛はほとんどないが、光る頭が血色の良さを表している。着衣は藍染めの作務さむえ衣で、足は草履履き。顔立ちは福々しく、全体の印象はまさに「好々爺」だった。

野宮はどうか怒りを抑えると、

「和久井くん！ この人たちにリアルのなんたるかを教えてあげなさい」

すると電話を受けていた和久井助手が、

「先生、しばしお待ちください。正門前からの連絡で、たつたいま、もうおひとり、リアルだというかたが来られたそうです。今こちらに向かっているとのことですよ」

「ああそうですか！ まったく今日はリアル大豊作の日ですな！」

やがてもうひとりのリアルは、野宮の真っ赤な顔から血が引く間もなく、入口に現れた。

ふいに講堂の中が明るくなったような気がした。その人物は光とともにやってきた。

「お邪魔いたします！ 柊拓巳と申します！」

男は大きな声で名乗りをあげると、丁寧に一礼して、中に入ってきた。

男が何者であるのか、誰の目にもすぐ判った。

きれいに剃り上げられた頭。身にまとった漆黒の袈裟。手には数珠がしっかりと握られている。

まるで絵の中から抜け出て来たような「お坊さん」である。

萌黄は直感で、リアルだと確信した。

長身の僧侶は迷う様子もなく、優雅な足取りで萌黄た

ちの集団に歩み寄った。付き添いの迷彩服があわてて駆けてくるほど、歩く速度が速かった。

「失礼ですが、あなたがたもリアルなのですね」

男は楽器の音色かと思うほど、美しい声で訊ねた。

「そうです……」

一番前にいた萌黄が眩しげな顔で答えると、男は彼女の手を取って、

「呼んでいただいてうれしく思います。柘です。どうかお見知り置きを」

萌黄はハツとして思い出した。

「招待メールに、早々にお返事くれたかたですね」

「はい。津山から参ったのですが、移動手段が限られており、思いのほか時間がかかってしまいました」

口調は淀みなく、その眼差し同様に優しげだ。萌黄はつられて言わずもがなの言葉を口にした。

「お坊さんだったんですね」

すると柘は、はいと照れたように笑い、

「まだまだ半人前、修行中の身です」

年齢は三十歳前後か。快活そうな身のこなしにも、風格のようなものが漂っている。

「ご苦労なされたのでは？」

清香が横から言うのと、柘は途端に顔を曇らせた。

「はい。あの日の朝の驚きは筆舌に尽くせません。寺の

中が左右そっくり入れ替わっていたのですから。間取りも調度も、もちろん仏様も。そして窓から眺めた風景も、見慣れたものがすべて逆。——ああ、皆さんも同じ経験をされたのですね。……私はひどい風邪を装って部屋の奥にこもっております。それから家を一步も出ていません。家人がいないのでその点は楽でしたが」

柘は身振り手振りを交えて話す。人前で話すのが手慣れているようだ。萌黄たちは、ついつい彼の話に引き込まれていた。

「待った待った」野宮の決して上品とは言えない声が、話を中断させた。「柘さん。まずあなたのしなければならぬことは検査です。リアルかどうかの判定を我々にさせてください」

「おっとこれは失礼しました。先生のおっしゃるとおりですね。それでは皆さん、また後ほど」

しかし判定時間は、たった数分。結果はすぐに出た。もちろん、リアルである。

野宮はホワイトボードに名前を書き加えた。

光嶋萌黄

駿河炎

影松清香

ビツグジヨーク齋藤

齋藤元

柊拓巳

×ハモリ

×（十七歳の男性・秋田）

×（二十六歳の女性・神奈川）

×（四十一歳の男性・山口）

「あとふたりか」

野宮がつぶやいた。

萌黄は興奮した。呼びかけてからわずか二日。これほど早くリアルが集まるとは、上出来も上出来だ。

（これで転送装置がちゃんと稼働して、大津に向かったリアルキラーズが伊里江兄を捕まえてくれたら、事件は解決かあ）

「リアルとは？」の講義を始めた野宮と、耳を傾ける人々を見ながら、萌黄は思った。

（ハジメ君みたいなの、ちよつと怖い人もいるけど、変な人がいなくてよかった）

しかしその思いは、夕方になって打ち碎かれることになった。

陽が傾く前に、エネ研からニュースがふたつ、もたらされた。ひとつは拍手を持って迎えられ、ひとつは聞く者を仰天させた。

「喜んでください。転送装置の完成に足りなかった部品が、いよいよ明日到着します」

野宮は応接室に集めたリアルたちを前に、喜々として報告した。

「あんな副社長でも役に立つもんです。ゴリ押し魔人（副社長のことらしい）の働きかけの結果、明日へリが部品を運んできます。そうなれば、遅くとも深夜には転送装置への組み込みと実験ができますから、あなたがたの帰還はあさつての午前となるでしょう」

小さな歓声が起こった。元の世界に戻るこのうれしさと、反面、ふたつの世界をつなぐトンネルをくぐるという未知の体験への不安が入り混じった声だ。いや、彼らは一度そこを通っているはずなのだが。

「もうひとつ。これは萌黄クンと柊さんに関することなんだが」

そう前置きすると、野宮は壁のテレビ画面をオンにした。映し出されたのは、何重にも重なった折れ線グラフだった。

「皆さんには、検査を受けていただいた直後から、モニター用の腕輪を填めていただいています。得られたデータ

はもちろん皆さんが帰還する際の、装置の微調整に反映されます。

さてこの図は、皆さんの中に蓄積されつつあるエネルギーの度合いを示しています」

「いっぴいになったら爆発するつちゅうヤツでんな？」

齋藤老人が訊ねる。

「そうです」

野宮は指し棒で重なった線の上をなぞった。

「ほとんどのかたは来られたばかりなので、大した変化はありません。しかしながら——」

指し棒が、グラフ線の群れから離れた線へと移動した。

「これは萌黄クンのエネルギーです。ご覧の通り、若干低い」

「どうして？」 清香が問う。

「理由は後で述べます。エネルギーの蓄積が少ないこと。それはつまり、爆発までに残された時間に余裕があることを表します。萌黄さんの場合は二日です。」

これは妙なことなのです。同じ日、同じ時にリアルとして転送された者は、蓄積エネルギーも同じでなければならぬはずですから」

「先生サマよ。授業やないんやから、もっとやわらかく言うてくれ」

齋藤老人が口を挟んだ。野宮はムツとしたが、言葉を

続ける。

「萌黄さんのエネルギーは他のかたより少ない。ところが先ほど来られた柊さんのグラフはこれです」

指し棒が下がった。萌黄は気づかなかったが、X軸に接するようにもう一本の線があった。

「エネルギーは限りなくゼロに近い。おそらく何らかの形でエネルギーが放出されているに違いない」

「地震——」

萌黄がつぶやくと、リアルたちの目が彼女に集中した。

「そうだ。萌黄さん自身、移動する先々で二度ほど地震を経験している。柊さんがおられた津山でも何度か地震が起こってましたが、ご記憶ですか？」

「え、ええ」柊は大きく目を見開いて頷いた。「私も行った先で何度か地面の揺れを感じました。——それは私のせいだとおっしゃるのですか？」

「そうなのです。あなたが起こしていたのです」

「まるでナマズになった気分だ」

野宮は頷くと、

「自覚のないのが残念ですが、リアルの皆さんには、転送される時までエネ研に近づかないようお願いしている理由がそこにあります。とはいえ、できればもう一回、地震を起こしていただきたい。今度はちゃんとデータとして記録・分析できますから」

暮れなずむキャンパスを、萌黄は柊の案内をしながら歩いていた。柊は萌黄の逃亡劇にひどく興味をそそらせているようだった。

「空気まで操れるのですか。すごいですね。スーパーマン以上だ」

「わたし、怖いんです」

「……………」

「後になって、すごく後悔してるんです。もし自分の能力が、誰かに怪我を負わせたらどないしようって。もう、ひとり、わたしのせいで亡くなった人もいますし」

サキの顔が脳裏をかすめる。そんな萌黄を見おろしながら柊は言った。

「萌黄さん、今はあれこれ考えるのはよしましょう。我々は望んでもいないのに、こんな常識外れの世界に、勝手に放り込まれてしまったのです。鏡の国のようなこの世界では、正気であることさえ難しい。事情を知った今でも混乱しています。だから——」

柊は雲間から差す夕暮れの光に顔を浸した。

「悩むのは、元の世界に帰ってからにしませんか」

萌黄も黙って夕焼けを眺めた。向こうの世界でも今日は夕焼けが見えてるのだろうか、などと思いつつ。

「あとふたりでしたか」

不意に言われて、萌黄は目をしばたたかせた。

「あ、リアルの数ですね。そうです」

「どんなかたがたでしょうねえ」

「ひとりだけ候補がいます」

「ほう。どんな？」

「將軍と呼ばれるお爺ちゃん」

双眼鏡を覗いていた狐目の男は、コンと一声鳴くと、急いで老人のもとへ駆け戻って来た。

「閣下、目的地は完全に包囲されていますよ」

「なんたること。我々の到着が遅れたせいか！」

「まるで虫みたいな段だら模様連中が、各々武器を持って待ち構えています、コンコン」

「何じゃ？ 狐でもいるのか？」

「これは私の咳です。風邪をひきまして」

「まぎらわしい奴だ」

「どう致しましょう？」

「薬でも飲んでおけ」

「そうではなく、目的地のことで」

「決まっておる。突撃あるのみ」

狐目の男はポンと膝を叩いた。

「そうこなくっちゃ！ いえ、了解しました。すでに準備は整っております。ひと暴れしましよ！」

太陽が山陰やまかげに沈んだ、ちょうどその時。

京都工大の正門と通用門に多数の人影が忍び寄ってきた。

逢魔が時。その暗がりくらがりに身をやつした彼らは、音もなく門に近づくと、いきなりそれぞれの持っていた火器を発砲し、大きな声で氣勢を上げた。

警備していた迷彩服たちは驚いたが、そこはさすがに戦闘のエキスパートである。長野防衛隊による奇襲の後だけに緊張感が残っており、きびきびとした動きですぐさま非常警戒態勢をとった。

投光器が門の前を昼間のように明るくした。  
激しい銃撃戦が始まった。

空の上にガス気球が浮かんでいる。ゴンドラに乗る男が手持ちマイクを取り上げた。

「キャンパス中央に到着しました。どうぞ」

《よし、やれ》

「了解」

男はレバーをぐいと引き上げた。すると、ゴンドラの下に吊るされていた物体が、ゴンドラを離れて落下して

いった。

大学を囲む壁には高圧電流が流されており、内側にも二重三重にフェンスが張られている。そして、キャンパスの外周には地雷やレーザーなどの阻止装置が多数敷設されていたが、鉛直方向、すなわち空は真空地帯だった。ましてや明かりが灯るか否かという微妙な時間帯。ガス気球の侵入に気づいた者はひとりもいなかった。

ゴンドラを離れた丸い物体は、パラシュートもなく自由落下した。ところが着地するやボールのように二、三度弾み、噴水脇の植栽にひっかかってようやく地面の上に落ち着いた。

『閣下、到着したようです』

『うむ』

物体の中で短い会話が交わされると、闇を切り裂くような光が走り、シューッと空気の漏れる音がして、物体は萎しんでいった。

中から現れたのは、閣下と呼ばれた軍服姿の老人と、やはり軍服を着た狐目の男だった。

「初めて乗ったが、これは一体何という乗り物だ？」

「さつきも話したじゃありませんか。……NASAが火星探査用に開発したバルーン付きの着陸船、そのコピーモデルです。ウチの親父に話したら、快く貸してくれましてね」

「貴様の父親はどんな人物なのか？」 「それも話した  
じや……。えーつと関西最大の暴……。某組織の、えー、  
リーダーを務めています。父は無類の宇宙開発フェチなん  
ですよ」

「よく判らんが、良い親父殿を持っているな」

「恐縮です、閣下」

ふたりは周囲を見回した。銃撃の音が遠く聞こえる。

「閣下のために、仲間ががんばって引きつけています。

おかげで誰にも気づかれず、侵入できましたぜ」

老人は頷き、腰に手を当てると、玉の散るようなサー  
ベルをスラリと抜き放った。

「私は運命にしたがい、リアルなる者に会わねばならん。  
行くぞ、信太<sup>しのだ</sup>。ついてこい」

「合点でさあ！」

『何ごとでしょう？』

最も早く騒動に気づいたのは炎少年だった。高感度マ  
イクのおかげで、聴覚は人の数倍あるという。

「通用門のほうかな」

僧の柘拓巳は椅子を離れると、網戸を開いて外を見た。

ここは柘の割り当てられた部屋で、萌黄、清香、炎、  
ビッグジョーク齋藤が親交を深めようと集まっていた。

ハジメも無理矢理引っ張ってこられて、隅にいた。

「また長野のかな？」

清香が身体をすくませる。

不安そうに顔を寄せ合う中で、齋藤だけがニヤニヤしている。

夕闇を縫って、迷彩服たちが走っていった。

(これ以上、ドキドキさせんといほしいわ)

窓から目を離そうとした瞬間、萌黄の耳たぶをヒュンという音が叩いた。

「どうしました？」

柊の問いかけた。萌黄は暗い空を見上げた。

ドサツ——ヒュツ——ドサツ。

『大きな物が落ちてきましたね』

炎が言った。目を凝らしても見えないが、何かが降って来たことは確かなようだ。

「誰も気づいてへん」

萌黄はドアに向かおうとしたが、それより早く柊がドアを開け、廊下に向かって叫んだ

「中庭に正体不明の物体が落ちてきました。大至急、調べてください！」

鼻毛を抜いていた見張り番の迷彩服は、慌てて階段を駆け降りていった。

「フフフ、ここにおったら——」齋藤がハジメに流し目を送った。「退屈だけはせんようや」

大将は信太をともない、植栽に沿った暗がりをつくり移動していった。

あたりに人影はない。

(リアルというご仁は、いったいどこに?)

部下の信太は情報収集能力に長けた男だった。数日前、彼は詳細なキャンパスマップを入手すると、念入りに突入作戦を練ってきた。

大将は信太に手渡された携帯をオンにした。画面に立体地図が立ち上がり、内蔵の方位磁石に合わせて、ミニチュアの建物群がグルッと回転した。

彼らがいるのはキャンパス中央辺り、いくつかの実験棟にはさまれたグラウンドのど真ん中である。周囲には木々が立ち並び、あずまや四阿もある。昼間は憩いの場になるのだろう。水を吹き上げている噴水もあるので、多少の話し声はかき消される。

「閣下、怪しいのは丸い建物です」

信太が指さすと、立体映像の建物の上に『エネルギー工学研究所』の文字が現れた。

「出入りの業者によると、ここが一番警戒嚴重なんだそうですぜ」

「判った。そこへ行こう」

大将は短く言い、足を踏み出そうとした時、

「誰だ!？」

銃を構えた迷彩服が立ちほだかった。柵の部屋の前にいた見張り番の男である。急いで建物を出てきたところで、ばったりと遭遇してしまったのだ。

大将は少しも臆せず、

「我が名は五十嵐寛壽郎である」

名乗りを上げて、サーベルを振り上げた。

「て、抵抗するか？ 撃つぞ！」

迷彩服は銃を構えた。

五十嵐は一步前に出ると、スツと手を振り下ろした。

すると迷彩服の銃が、スパツと前後に泣き別れた。

「ピヤツ」

思いもかけず、サーベルの切れ味を見せつけられた迷彩服は肝をつぶし、ふたつになった銃を放り出した。それでもリアルキラーズの一員だけはある。すぐに腰のピストルに手を伸ばした。

だが五十嵐の太刀捌きのほうが速かった。サーベルをひるがえすと、迷彩服の首筋をその峰で打ち据えた。

信太は手を打って喜んだ。

「斬らなかつたんですかい？」

「無益な殺生だ」

五十嵐はすたすたとエネ研に向かう。

信太はつぶやいた。

「虫も殺さない時があるかと思えば、血も涙もなく斬りまくることもある。どうにも理解を超えたお方だ」

「あつ、倒れた」

萌黄の両目が、地面に崩れる迷彩服の姿を捉えていた。続いて、暗闇から出てきたふたつの人影に驚き、

「どうしよう。あの侵入者たち、エネ研のほうに行こうとしてる」

心配な声を上げると、柊が前方を指さした。

「加勢が来たようです」

見張り番の男は賢明だった。あらかじめ本部に異変ありとの連絡を入れておいたのだ。

新たに現れた迷彩服のひとりが、空に向かって照明弾を打ち上げた。真昼のような光に照らされて、五十嵐と信太はつんのめるように足を止めた。周囲には隠れる場所はなかった。

「そのふたり！ 両手を挙げ、地面に膝をつけ！」

迷彩服のひとりが言った。

「か、閣下あゝ。どうしましょう」

五十嵐は無言で敵を睨んでいたが、やがて膝を折ると、

迷彩服の言うとおりにした。信太もあたふたと彼に従った。

迷彩服たちが構えたまま、ふたりに近づく。

「その刀も手から離せ。地面に下ろすんだ」

五十嵐はまた言われたとおりにした。サーベルが地面に置かれる。

またたく間に武装解除がおこなわれた。五十嵐の所持していたのはサーベルのみだったが、信太は全身これ武器の塊といった具合で、ピストル以外にも、ナイフ、手榴弾などが次々と出てきた。

「フザけた奴らだ。どこから入ってきやがった」

迷彩服のひとりはそう言って信太の腹を蹴り上げた。

「信太ッ！」

五十嵐は顔色を変え、信太に駆け寄ろうとした。

「動くな、爺さん」

伸びてきた手が、五十嵐を羽交い締めにした。腕力では敵うべくもない。

「閣下ぁーっ！」

信太が絶叫した。

その声は五十嵐の耳に飛び込むと、彼の脳髓を異常なほど激しく揺さぶった。

(ひ——寛之ひろゆき)

唐突に五十嵐は孫の名を思い出していた。先日、渋谷

で愚連隊に襲われ、大怪我を負った、可愛い孫の名。寛之は今も病院のベッドで伏せている。

信太の歪んだ顔が寛之のそれに重なった。

〈カチツ〉

スイッチが押されるような音がして、五十嵐の意識に急速に幕が下りてきた。

そして抗あらがいようのない力が彼を飲み込んでいった。

## 14

五十嵐の左足がスツと後ろに伸び、背後から彼を捕えた迷彩服の足を横に払った。

「うおっ？」

老人だと見くびっていたのだ。迷彩服はバランスを崩し、背中から地面に倒れた。同時に、狙って振り下ろされた五十嵐の肘攻撃を受け、たまらず腕を離した。

自由になった五十嵐は、地面に落ちたサーベルをつかむと、信太の顔を踏みつけている足を薙ぎ払った。

「ぐあっ！」

斬られた迷彩服は、足首から血——すぐに砂に変わった——を吹き出しながら倒れていった。

「やはり妖怪であったな！」

五十嵐は異様な光を宿した目で、次の獲物を睨んだ。

「抵抗するか！」

残りの迷彩服は銃を構え直したが、五十嵐は老人とは思えない動きで彼らの間を駆け抜けた。

「ん!？」

「ぐはっ！」

彼らには何が起きたのか判らなかつただろう。ある者は胴を深く、ある者は頸動脈を斬られ、噴水のように砂を撒き散らした。

地面に這いつくばっていた信太が顔を上げた時、彼のまわりには、中身のない迷彩服が脱ぎ散らしたように落ちていただけだった。

「——閣下？」

信太は五十嵐を見た。

大将の目は、透き通るような青い色をしていた。

(また、狐憑きつねつきだ！)

信太はブルツと怖気をふるった。彼は幾度かそんなトランス状態の五十嵐を目撃していた。いつも人を斬った時だった。斬ったからそうなるのか、そうなるから斬ったのかは判らない。判っているのは、こうなると五十嵐は手に負えないということぐらいだ。話も通じないし、暴走を抑えることもできない。ただ、憑き物が落ちてくられるのを、ひたすら待つしかないのだ。

「あのおじいちゃんや！ わたし知ってる！」

萌黄の声に、窓辺に集まったリアルたちは我に返った。

「誰なんです」

柊が訊ねる。

「大将と呼ばれてる人。刀で十人以上の人を斬った人」

齋藤が顔をしかめた。

「凶悪犯罪者かいな。なんでそんな物騒な人間が？」

「萌黄さん。あなたがおっしやっていた將軍というのは、

もしかや？」

萌黄は柊を見上げて頷いた。

「あの人です」

エネ研正面のドアがスライドし、新たな迷彩服たちが出てきた。彼らは迫ってくる五十嵐の服装にぎよつとしたようだが、すぐに銃を抜くと迷わず撃った。

五十嵐のサーベルが一閃する。銃弾は縦に斬られて地面に突き刺さった。

迷彩服たちはあわてふためいた。しかしその中にいたシユウが前に出てくると、別の銃を構えた。

パンツ。

弾はやはりサーベルの餌食になったが、空中に煙が広がった。五十嵐がそれをひと吸いした途端、足をよろめかせて地面に膝をつく、前のめりに倒れた。

催眠ガスだった。

「どうなった？」

齋藤が問うと、炎は、

『ガスのようなものにやられました。今、エネ研とは別の建物に担ぎ込まれていきます』

炎は目となるカメラのズームを最大にして、事の成り行きを部屋の仲間に伝えていた。

「老人とは思えない俊敏さでしたね」

柊が感嘆の声を漏らす。

「わたし、おじいちゃんの様子を見せてもらえるよう、頼んでみるわ」 萌黄は窓を離れた。「おじいちゃんは、招待状を出したわたしらに会いに来てくれたんやから」

「行きましょう。わたしも気になります」 柊もドアに向かう。「五人も砂にしたのですから、無事では済みますまい」

「わたしも行くよ。年寄りには年寄り同士が一番だ」

ビッググジョーク 齋藤がどっこいしょと腰を上げた。

〈第十五章につづく〉